

'ο κόσμος, αλλοίωσις' ο βίος, υπόληψις.'

1号 1989.9.17

文・編集・発行
 恋 怪子

LIVE: THE ピーズ 1989.9.2 日比谷野外音楽堂

CD: THE STREET BEATS "NAKED HEART"

THE ピーズが撃つ機関銃の弾が、つぎつぎとシャボン玉にかわって夕暮に近い日比谷公園の上空に消えていった。ハルの歌は、ほとんど誰にもとどいていなかった。

THE ピーズは真性ロックバンドである。真性コレラとか疑似コレラとかいうときの"真性"。真性ロックはメジャーにはなり得ない。メジャーという場所には、行こうとすれば行くことはできるかもしれないけれどもそこに長居はできないはずだ。もし真性ロックのままではいようとすれば、9月2日 日比谷野外音楽堂の"WHO'S GENERATION"というイベントでTHE ピーズを見てそう思った。

真性ロックと真性ロックと感ずることは真性コレラに罹るようなものだ。急速に激烈な症状がぶり、失神時間を月負がつく。真性コレラは腸にくるが、真性ロックは脳髄にくる。真性ロックに罹るような人たちの数はいつだって少ない。新宿ロフトをいっばいにするくらいは、いるかもしれない。しかし日比谷野外音楽堂をいっばいにするほど、そんなに多勢は、いるわけがない。

9月2日 日比谷野外音楽堂に来た女の子たち(男の子は全部で100人いたかどうか)のほとんどは、あとでやったKUSU KUSUが目当てだったことがKUSU KUSUの演奏を見て、女の子たちの様子を見てわかった。KUSU KUSUはいま騒がれているようだが、ただの騒ぎのバンドじゃない。格好つけていないし、ことばも借りものじゃない。決してでたらめじゃない。独特のものをもっていて、その独特のものは、もしメジャーに行ったらとらえとて大まか育つような、そういうものである。私には必要ないバンドだが、いいバンドだと思う。この日やった7バンドのなかでもKUSU KUSUの出来がいちばんだった。

KUSU KUSUを見当てて来た女の子たちも前にして、THE ピーズに何かができる? あの女の子たちは、いうならばメジャーな観客であらう。うすらと脂肪のついたからだをゆるやかに軽やかにゆすられるのが楽しい。真性コレラどころか疑似コレラにも罹らないようなメジャーな女の子たちとTHE ピーズとのあいだにはなんのやりとりもおきない。THE ピーズから真性ロックが突き出されてくるのに、まく倒れから それに見合う質と量の反逆心がステージに突き返されていかない。機関銃の弾がシャボン玉になって消えていくだけ。あれだけ事柄に対して鋭敏なセンスをもってハルが、このことに気づかないはずがない。

WORDS: JANIS JOPLIN



でも当時も今も、あたしは、やっぱりあたしよ。この世の中に、ビートニクとして出たんだから、あたしにとって正しいと思われたい。何者か、したかった。実業家になろうとも、先生になろうとも思わなかった。だって、なろうと思えばなれるんだから。お金持ちにもなりたくなくてあたしは、ただ、それがあたしにとって正しいと思われたい。何者かになりたかっただけなの。」
 ジャニス・ジョプリン
 ティヴォッド・ドイルン著
 『ジャニス・ブルースに死す』より。

- いま!!!なバンド ティラザウルス 1/6 渋谷ラ・ママ 1/6 渋谷ラ・ママ
 RIP VAN WINK 1/7 下北沢屋根裏 1/7 吉祥寺 クレッシュメント 1/9 渋谷ラ・ママ
 THE BONZ 1/17 原宿歩行者天国 DOOM
 THE BARRETT 1/24 新宿 ロフト(ワンマン) 10/9 神楽坂 EXPLOSION (ワンマン)
 フレデリック 10/31 渋谷ラ・ママ(ワンマン) 11/2 インスタティック 芝浦 (ワンマン)

第2号は 1/6 渋谷ラ・ママ ティラザウルス 10月5日 THE STREET BEATS のライブを配ります。

17歳という年齢は、それだけが突出している。16歳の次に来て、18歳に付なかる。そういう連続性を拒否する。17歳でいるということは、鋭く尖ったナイフの刃の上に乗っていることなのだ。どんな小さな身動きも血を流さずにはすまされないし、髪を逆立てるほど神経を見覚えさせていなくては、一瞬の平衡も保てない。鋭く尖ったナイフの刃の上で、その視線は、人間を見据える。その視線は他人を刺し、自分をも刺す。刺しても刺しても、ゾンビを相手にするごとく終りのない殺戮。その殺戮のなかで憎悪、不安、死、自由、がむぎ出しになる。しかし、それらの殺戮は全て、幻なのである。砂漠を行く旅人が、屋敷様をスワと知るように、少年はそれらの殺戮が幻であったことも知る。もはや血は流れない。髪も逆立つことはない。人間を見据える視線に霧がかかる。そして、日常性のなかで、等身大に生きていくことを手に入れる。これが17歳から生きのびた、ということなのである。反逆性をいうならば、ロックンロールは音楽であるというだけでなく、生き方でもある。17歳の生き方である。だからロックンロールにひきつけられるのは、いつも17歳の少年たち(実際の年齢が17歳という意味ではなく、ナイフの刃の上に乗っているという意味)である。ロックンロールに大人の成熟はない。大人の成熟ということのないロックンロールの世界で、17歳を生きつづけるのは、ロックンロールビジネスの罠をはねつけるより、もっと困難なことかもしれない。17歳で17歳を生きるのに選択は、いろいろな22歳で17歳を生きるのには選択がいる。たとえばそれが歌のなかであって、ステージの上であって、である。17歳をくり返し生きたふし、見据える視線を鋭く、尖ったままで存在することと現在からのOKは、選びとっていいだろうか。もしこの困難を生きつづけていければ、17歳を全々のスワとしまっせいな。仮死状態ではあっても17歳の実体を未だかかえている人たちの17歳を、一瞬で見覚えさせずにはおかないだろう。

LD: LES PAUL HE CHANGED THE MUSIC

"レス・ポール・ギター"の創始者、レス・ポールがギタリストや歌手をゲストに迎えてギターを弾きまくるライブのレーザーディスク(ビデオも)で、THE SUPER SESSION IX LES PAUL HE CHANGED THE MUSICを見た。

たぶんもう70才くらいになっているレス・ポールが出てきてギターのデモンストレーションをやる。そして、ヴァン・ヘイレン登場。名前しか知らなかったが、これを見て一目で大好きになった。うまいだけじゃないんだ。今度来日したら絶対見にいこう。B.B.キング、パワフルなブルース。レス・ポールとのかけあい(ギターもおしゃべりも)もいい。レス・ポールとマリー・フォード(コンビで多くのヒット曲を出した。ちなみに私はこのディスクをみてレス・ポールとマリー・フォードのレス・ポールが、レス・ポール・ギターのレス・ポールと同じ人だということも知った)のヒット曲を歌うリタ・フリージ。ステキ!なんというシブイ声。そして、それによりそのようなレス・ポールのギター。レス・ポール・トリオのしみじみした演奏につづいてスモークの中からがっつりした男があらわれ、すごいギターを弾く。これ誰? 演奏のあとでレス・ポールがティビット・ギルモア(ピンクフロイドの)だと紹介する。そして、レス・ポールのいう「驚異のギター・プレイヤー」スタンリー・ジョーダン。つぎがウエイロン・ジェニングスの歌。これも実にきかせる。さいごがストレイ・キャッツ!!! 名前も知らなかったくらいなのに、あまりにカッコよくて、このディスクを見たスイングというジャズ喫茶のすぐ前には渋谷のタワーレコードで、ストレイ・キャッツのCDを帰りに買ってしまった。大きな画面、いい音で見てまく全員登場のロックン・ロールは圧巻。さあ、スイングへいって、レス・ポールくらいの身のマスターに「レス・ポール見せて下さい」とリクエストしてみたら? 飲物は400円。

タワーレコード
 スイング TEL (461) 7860 (463) 3743
 11:00AM ~ 11:30PM
 年中無休